

文芸

俳句

朝の日に濡れて光りぬ返り花

池田 逸子

小豆打つ上総の日はし丸ごとに

伊藤 敬子

初時雨散歩ためらう老二人

今関満喜子

鈴生りの隣りの密柑気に掛かる

魚地 照子

空白は恙なき日や日記果つ

川島 通則

雄叫びを挙げて到着鴨の陣

向後 寛

寒椿さびれし路地の遊園地

越川せつ子

山茶花や笑窪美人の昔人

小松 藤男

語り部や稲架吹く風峡の里

佐瀬 輝夫

雪兔日ごと崩るる認知症

椎名万里子

橋渡る水面に映える枯木かな

市東富美江

小春日の布団に詰めし温もりを

鈴木とし子

老いると言う事感じつつ年暮るる

鈴木 利子

晴天も暮れ行く早き十二月

土屋美枝子

すすき穂の光流るる河口かな

土屋 義昭

風に舞いくるくる踊る落葉かな

内藤 くに

おかわりと言う人なくてむかめし

早川 勇

頻りなるつぶて木の実の音立てて

藤田 雅夫

山畑の三時に食みし手作りの

伯母の蒸しパンほんのり甘き

沖繩を知らなき亡夫に見せたしと

うす紅色の貝を拾ひぬ

田崎 尚美

柿挽ぐと高枝鉋を思ひきり

伸ばすも届かずその朱き実に

唯今とリュックのままの男の孫は

日米野球にチャンネル変へり

鈴木まさ子

気がつけば背中丸めてせかせかと

歩く足どり祖母に似てきぬ

文化祭に陶の花びんが展示あり

友逝き三年御夫君の作

学友の姑上くれし黒豆を

元とし今も作りつづけり

異国人キリスト教でもないけれど

聖夜の日にはケーキ買い居り

自己流で切る松の葉のすき間より

青澄む秋の空がのぞけり

雲ひとつなく澄み徹る朝の空

残月いつか見えなくなりたり

...

二日程留守せし我に飛びつきて

犬は耳にも甘噛みをする

庭にくる鴨の声孫の持つ

電子辞書にも高鳴くを聞く

...

夕餉すみ妻の気合の声ひびき

歩けにでかけ冬のひとつき

吾を見る人はなきにと思ひつつ

駅の鏡に身なりととのふ

...

遠き日の記憶が今に蘇り

弱る足腰若さ戻らず

高梨 キヨ

八角 三枝

水須 俊

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

短歌

こうほう博物館 82

冬のぬくもり

正月は新春ともいい、少しづつ日差しが延び暖かな日もあるが、小寒、大寒と最も寒さが厳しい季節となる。今ではストーブやエアコンなどを使い冬でも暖かく快適な生活ができるようになったが、昔は服の重ね着や綿入れの絆纏をまとい、火鉢や炬燵で暖をとる。今、炬燵が広く使われている。炬燵は、囲炉裏の上に檜をのせ、布団を被せた揺り炬燵からはじまり、江戸時代には移動可能な置き炬燵が登場した。写真は町内の方から寄贈された置き炬燵である。約50cm四方の木で組まれた檜の中に、炭を入れる瓦器があり、火をおこした炭をそこに入れ、火を被せて暖をとれる仕組みの炬燵である。かつて、家族がこの炬燵に入りながら温もりを感じ、蜜柑を食べ、春の待ち遠しさを語りながら団欒した姿が想像される。

(社会文化課 道澤 明)

今回紹介するのは、昭和の前半まで実際に使われていた炬燵である。炬燵は室町時代に発明された日本の伝統的な暖房具で、今日でも電気炬燵が広く使われている。炬燵は、囲炉裏の上に檜をのせ、布団を被せた揺り炬燵からはじまり、江戸時代には移動可能な置き炬燵が登場した。



▲昔の炬燵檜

作品展

◎町民会館ミニギャラリー

- 1月 水墨画クラブ
- 2月 木目込みクラブ

◎文化会館ロビー展

- 1月 華舟会
- 2月 生け花クラブ

◎サビア展

- 1月 写友会
- 2月 短歌会

◎銚子商工信用組合展

- 1月 横芝写真クラブ
- 2月 アート押し花クラブ